

薩摩守忠度は、一の谷の西の手の大將軍にておはしけるが、紺地の錦の直垂に黒糸威の鎧着て、黒き馬のふとうたくましきに、沃懸地の鞍おいて乗り給へり。その勢百騎ばかりがなかに打ちこまれて、いとさわがず、ひかへひかへ落ち給ふを、猪俣党に岡部の六野太忠純、大將軍と目をかけ、鞭鐙をあはせて追っ付き奉り、「そもそいかなる人でましまし候ぞ。名のらせ給へ」と申しければ、「これはみかたぞ」とてふりあふぎ給へる内甲より見いれたれば、かね黒なり。あっぱれみかたにはかねつけたる人はないものを。平家の君達でおはするにこそと思ひ、おしならべておずとくむ。これを見て百騎ばかりある兵ども、国々の借り武者なれば一騎も落ちあはず、われさきにとぞ落ちゆきける。薩摩守、「につくいやつかな。みかたぞと言はば言はせよかし」とて、熊野そだち大力のはやわざにておはしければ、やがて刀をぬき、六野太を馬の上で二刀、おちつく所で一刀、三刀までぞつかれける。二刀は鎧の上なればとほらず、一刀は内甲へつき入れられたれども、うす手なれば死なざりけるを、とっておさへて頸をかかんとし給ふところに、六野太が童おくればせに馳せ来って、打刀をぬき、薩摩守の右のかひなを、ひぢのもとよりふつときりおとす。今はかうと思はれけん、「しばしのけ、十念となへん」とて、六野太をつかうで、弓だけばかり投げのけられたり。その後西におかひ、高しうに十念となへ、「光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」と宣ひもはてねば、六野太うしろより寄って、薩摩守の頸をうつ。よい大將軍うったりと思ひけれども、名をば誰とも知らざりけるに、簾におすび付けられたる文をといてみれば、「旅宿の花」といふ題にて、一首の歌をぞよまれたる。

「ゆきくれて木のしたかげをやどとせば

花やこよひの主ならまし 忠度」

と書かれたりけるにこそ、薩摩守とは知りてんげれ。

太刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、大音声をあげて、この日来平家の御方にきこえさせ給ひつる薩摩守殿をば、岡部の六野太忠純がうち奉ったるぞや」と名のりければ、敵もみかたもこれを聞いて、「あないとほし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人を。あつたら大將軍を」とて、涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり。

薩摩守忠度は、一の谷の西の手の大將軍でいらっやつたが、紺地の錦の直垂に、黒糸威の鎧を着て、太くたくましい黒馬に、金粉銀粉をふりかけた漆塗りの鞍を置いてお乗りになっている。その軍勢百騎ぐらいの中に囲まれても、たいして騒がず、踏みとどまっては戦い、踏みとどまっては戦いしながら逃げて行かれるのを、猪俣党の岡部の六野太忠純が、大將軍と目をつけて、鞭と鐙をあわせて追いついて、「いったい、どのような方でいらっしゃいますか。名のってください」と言ったので、「私は味方だ」と言って振り向いた甲の内側からのぞくと、お齒黒をつけている。あっ、味方にはお齒黒をつけた人はいないのに。平家の君達にちがいないと思い、馬を並べてむずと組む。これを見て、百騎ぐらいいる兵たちは、国々の借り武者なので一騎も近づかず、我先にと逃げていった。薩摩守は、「憎いやつだ。味方と言ったなら言わせておけ」と言って、熊野そだち怪力の素早い動きであり、すぐに刀を抜き、六野太を馬の上で二刀、馬から落ちた所で一刀、三刀まで突いた。二刀は鎧の上なので通らない、一刀は内甲に突き入れたけれど、浅手なので死ななかったので、つかんでおさえて頸を切ろうとなさったところに、六野太の童が遅ればせに駆けつけて、打刀を抜き、薩摩守の右腕を、ひじの下からフツと切り落とす。これで最期とお思いになったのだろうか、「しばらく下がっている、十念を唱えよう」と言って、六野太をつかんで、弓の長さの二メートルほど投げ飛ばした。その後、西に向いて、高らかに十念を唱え、「光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」と言い終えなさんとすぐに、六野太はうしろから近づいて、薩摩守の頸を討つ。高貴な大將軍を討ち取ったと思ったけれど、名は誰ともわからないので、簾に結び付けられている文を解いてみると、「旅宿花」という題で、一首の歌をお詠みになっていた。

「歩き続けているうちに日が暮れて、もしも桜の木の下で
野宿するなら、今夜は桜の花が宿の主人となって
私をもてなしてくれるだろうに 忠度」

と書かれていたので、薩摩守とわかったのだ。

太刀の先に首をつらぬいて、高く差し上げ、大きな声で、「この日ごろ、平家方で有名だった薩摩守殿を、岡部の六野太忠純が討ち取り申したぞ」と名のつたので、敵も味方もこれを聞いて、「ああ、お気の毒に。武芸にも歌道にも達者でいらっやつた人を。惜しい大將軍を」と言って、涙を流して袖をぬらさない人はいなかった。